形の寫本全體としては、寫本執筆時點（おそらく一九世紀）に現存したホージャを中心とするグループにより、特定の政治的活動に關連して作成された可能性が考えられる。

要するに、本寫本はそのタズキラ部分と全體という二側面から、一八～一九世紀におけるカーシュガル・ホージャ家の活動の特徴的な斷面を直接的に反映するものであろう。

アブル・ファズルの皇帝觀について

近藤　治

ムガル朝第三代皇帝アクバルの時代に、帝國の體制が整備される。皇帝權の確立を中心としたこの體制の最大のイデオローグは、歴史家のアブル・ファズル（一五五一―一六〇二）であった。彼の描く皇帝觀はいかなるものであったのだろうか。主著の一つ『アクバル會典』に主として據りながら、見ていくことにしよう。

アブル・ファズルによれば、皇帝は何よりもまず「普遍的和解」（ṣulḥ-i kull）の推進者である。神の代理者であるべき皇帝によってのみ、さまざまな宗教信者の統一、協調を意味する「普遍的和解」は實現可能である。このような皇帝は、寛容さを具えた「完全人間」（insān-i kāmil）でもある。

第二に、皇帝は最高度の宗教的權威を有する者とされる。一五七九年のマフザル（宣言）の發表以來、アクバルはイスラム界においてムジュタヒド（立法行爲者）を凌駕した存在と目されたが、さらに、多宗派が並存する現實を踏まえて、太陽崇拜と結合した一種の皇帝崇拜が發達した。第三に、皇帝は帝國の體現者とされた。皇帝の權威の強化はムガル帝國の強化を意味し、皇帝權への背任はムガル帝國への挑戦に他ならない。そのために、皇帝權の強化に資するさまざまな儀式や措置が考案される。

アクバルは、まさにアブル・ファズルが描く理想的な皇帝觀にかなった、近世的獨裁君主であった。

宋代政治史料解析法試論
――時政記、日記史料を手掛かりとして――

平田茂樹

現在、宋代政治史研究は、李燾『續資治通鑑長編』、李心傳『建炎以來繫年要錄』等の史料を用いて研究が進められている。しかし、これらの史料を用いる際、その材料となった各種史料の特質、編纂過程は十分留意されていない。例えば、『續資治通鑑長編』は實錄・國史、『建炎以來繫年要錄』は日曆・會要といった敕撰史料を主に、私史・隨筆・行狀、墓誌等の私撰史料を副次的史料として編纂されているが、これら日曆・實錄・國史等の史料それ自體の性格を考慮した解析法の構築がなされてこなかった。

さて、宋代の政治史研究の主たる材料となる敕撰史料の編纂過程の大要を述べれば次の通りとなる。起居注、時政記をもとに日曆

（編年體）が作成され、日曆をもとに實錄（編年體）が作成され、實錄をもとに國史（紀傳體）が作成される。今日我々が用いる『宋史』は、元代に國史をもとに編纂されたものである。なお、宰相・執政が輪番で皇帝との政治會話を記した時政記が敕撰史料として編纂されるのは、唐代半ば頃から宋代を通じてであり、この時代は皇帝―官僚間を直接結びつける「對」と呼ばれる政治システムが發達した時代でもある。そして、宋代では、宰相・執政は時政記を作成するために、個々人が日記を記していたといわれており、『司馬光日記』、『王安石日錄』などの日記が史料編纂所に集められ、實錄・國史の編纂材料に用いられた。この二つの日記が、『神宗實錄』・『神宗正史』の編纂において、新法黨・舊法黨それぞれの思惑で用いられたことは餘りにも有名である。これら時政記、日記は皇帝との會話を記すことを主たる目的としており、『續資治通鑑長編』中のとりわけ神宗・哲宗期に殘されている皇帝―官僚間の豐富な政治會話の記錄は、時政記・日記史料を反映するものである。

今回の報告では、斷片的に殘されている日記・時政記を手掛かりに、宋代政治史料の利用方法及びその新たなる史料的可能性を提示したいと思う。

楚簡における卜筮祭禱簡の構造と復元

工藤元男

近年重要な楚簡が相出土し、それによって楚系文字の古文字研究や楚簡に含まれた先秦典籍の研究も進展し、楚簡研究は先秦文化史における一つの固有の研究分野を構成している如くである。これまで私は睡虎地秦墓竹簡を手がかりに、秦の南郡をフィールドに設定し、占領者秦と舊楚の對峙・交流・融合の諸相を秦楚相互の視點から分析する方法を提起してきた。そして楚簡の增加により、さらに秦の占領直前における楚の文化狀況の一端が知られるようになった意義は大きい。そこで今回は、とくに楚の宗教面における日常生活の構造を解明するため、包山楚簡を基準に、さらに望山楚簡などいくつかの斷片的な卜筮祭禱簡をとりあげ、それを全體の構造へ位置づけを試み、復元されたその資料からどのような史料的可能性が出てくるかを探ってみたい。

錢大昕と『（乾隆）鄞縣志』

稻葉一郎

錢大昕は、清代の歷史考證學の第一人者とされ、彼の『二十二史考異』『十駕齋養新錄』などでの精緻な考證の成果は今日でも高い評價を維持している。しかしながら歷史家としての力量については必ずしも明確な評價は出ていないのではないだろうか。彼が著わした『元史稿』は今日、行方不明になっているので、具體的にそれについて檢討することができない。多數の執筆者の一人として參加した『續通志』などを除けば、上記の課題を追究する上で、殘された可能な對象は彼の編修した地方志であろう。